

事例研究——自発的な教科外学習へ つなぐ創作ダンス学習

高橋 るみ子

1. はじめに

生涯学習に拓かれる創作ダンスをめざして、平成2年度より、学外発表を目標に、「創作ダンスのための課題解決学習」（以下課題学習）を用いた運動学実習「ダンス」（男女共修）を計画・実施してきた。結果、平成4年度から、「ダンスⅠ」「ダンスⅡ」を履修した第3学年に、“自主的かつ単位取得を目的としない履修”が見られた。さらに平成6年度には「ダンスⅠ」「ダンスⅡ」を履修した第3学年に、次年度には「ダンスⅠ」履修直後の第2学年に、創作作品の学外発表を目的とした“自発的な教科外学習”が認められた。

学習教育の場で発展的・継続的に取り上げられ評価されてきた創作を主体としたダンスの学習成果を、どうしたら生涯学習へつなぎ、生かすことができるのか。自発的な教科外学習の中で、生き生きと踊る・創る・発表する学生の姿に、その答えが隠されていると思われる。

そこで今回は、この自発的な教科外学習が、その前々段階である運動学実習「ダンス」をどのような学習体験によってもたらされたかを、平成6年度に行なった「ダンスⅠ」（90分×12回）の授業分析によって明らかにする。同時に、この自発的な教科外学習の目的である学外発表が果たす役割を、履修者の自作品に対する評価分から探る。

2. 運動学実習「ダンスⅠ」の事業分析

「ダンスⅠ」の毎時の内省文から、表現する立場で書かれた“自己の事実”（できたこと・できなかったこと）と“認知”（わかった点・わからなかった点）の記述を抽出し、KJ法を用いて分析した。結果、「表出させる技術」（40.9%）「気分」（30.9%）「見える——見せる」（18.8%）「自分らしさ」（8.6%）の4グループを得た。

これらのデーター数と記述内容から、学習の深まりと成果を探ったところ、学習導入部での「見える」の気づきと「表出させる技術」の体験が、初歩的な恥ずかしさを取り除くことが明らかになった。また学習発展部での具体的な「表出させる技術」の深まりが、見られるための行動を支え、「自分らしい」動きで「自分らしい」見方や考え方を「見せる」「楽しさ」を高めていたことが、同時に他者の「自分らしい」見方や考え方を表した動きを「見る」「楽しさ」を高めていたことが認められた。

これらのことから、「自分らしさ」を互いに動きで「見せ合う」楽しさが、自主的かつ単位取得

を目的としない履修（さらには自発的な教科外学習）へ進む内的動機になっていたと考えられる。

3. 自発的な教科外学習と学外発表

学習体験と活動の主体が異なる4作品（作品a-1年次「ダンスⅠ」授業／作品b-2年次「ダンスⅡ」授業／作品c-3年次・自主的かつ単位取得を目的としない履修／作品d-3年次・自発的な教科外学習）すべての活動に関わった学習者の評価文を分析の対象とした。なお作品aとdは「All Japan Dance Festival-Kobe」の参加発表部門に、作品bとcはコンクール部門に発表している。今回は事後評価というデーターの性格上、“満足感・達成感”に関する記述が95%を占めた。これをKJ法を用いて分析し、「仲間との親和的な関係」（18ポイント）「他者の評価」（14ポイント）「主題・イメージの伝達」と「作品の仕上がり」（11ポイント）「動き」（6ポイント）に代表される5グループを得た。

それぞれの満足感・達成感と、各作品（の学習体験・活動の主体性・発表の目的）との関係を探った結果、「仲間との親和的な関係」および「他者の評価」の満足感・達成感と“目的”の関係が認められた。また「主題・イメージの伝達」は“体験”が、「作品の仕上がり」は“体験”“主体性”“目的”のすべてが、それぞれ満足感・達成感に影響を与えていた。一方「動き」の満足感・達成感は、やや“主体性”に影響されてはいたが、“体験”“目的”との関係は見出だせなかった。

以上のことから、自主的かつ単位取得を目的としない履修や自発的な教科外学習における学外発表の役割は、上位目標（仲間と親和的な関係を築く・高い評価を得る）を達成するために行なう主体的な創作活動の下位目標であったと考えられる。

4. おわりに

大学期の「ダンス」であっても、自主的かつ単位取得を目的としない履修の内的動機となった楽しさに到達させるためには、あるいはその楽しさを十分に保証するためには、“仮説・検証の実証的実践をもって開発された”課題学習が有効であることが再認識された。加えて、学習者を次のステップ（自発的な教科外学習）へ向かわせるためには、“踊る・創る・観る”の学習成果を発表（上演）し、他者に評価される機会を学習者に提供することが必要だと痛感した。今後この大学期の学外発表を目的とした自主的な教科外学習が、創作ダンスの生涯学習としての第一歩であったことが実証されることを期待したい。

（本研究は、財団法人水野スポーツ振興会助成金を授けて実施したものである。）

〈引用・参考文献〉

山崎正和『演技する精神』中公文庫1988

松本千代栄『ダンスの教育学1』徳間書店1992